

東日本大震災

広域避難者受入れの記録



～三条市は避難者をどのように受入れたか～

三 条 市

はじめに

東日本大震災により、人命を奪われた犠牲者のみなさまに対して心から哀悼の意を表するとともに、地震、津波、原発事故等により被災されたすべての被災者の方に心からお見舞い申し上げ、そして一日も早い復興を願っております。

平成23年3月11日午後2時46分、三陸沖を震源とする日本観測史上最大のマグニチュード9.0の大地震が発生し、その後の大津波で東北地方を中心に甚大な被害をもたらし、死者・行方不明者は2万人近くに達し、その後の福島第一原子力発電所の事故により、避難者は数十万人にも上りました。

三条市においても、3月16日に新潟県からの依頼を受け、福島第一原子力発電所の事故の影響により福島県から避難して来る方の避難所での受入れを開始しました。市内で4か所の避難所を開設し、8月31日までの間に747人の方をお迎えいたしました。現在でも市内の民間賃貸住宅等において約200人の方が避難生活を送っていられます。

三条市では、平成16年新潟豪雨災害発生時に全国から多くの温かいご支援をいただき、これが復旧復興へのパワーとなりました。このため、今度は三条市が、被災地ではないからこそできる被災者支援を誠心誠意行うこととしました。

この記録誌は、三条市が福島県から避難された方を受入れ、どのように対応したかを記録したものであり、この受入れから得た数多くの経験を今後風化させることなく、次世代へ伝えていくために伝わるカタチとして発刊したものです。

平成25年 3月

三条市長 國 定 勇 人

目次

■ 第1章 避難者の受入れ

- ・避難者受入れの経緯 1
- ・避難者手記「福島県南相馬市から新潟県三条市へ」 3

■ 第2章 三条市が行った避難者支援

- I 三条市が行った避難者支援の流れと概要 6
 - 1 第1段階で行った支援 7
 - 2 第2段階で行った支援 11
 - 3 第3段階で行った支援 13
- II 三条市が行った避難者支援Q&Aもくじ 16
 - 各課が行った避難者支援のまとめ 18～90

■ 第3章 アンケート結果から見る今後の課題

- I 避難者アンケートより
 - 1 避難所の環境面 92
 - 2 避難所の運営面 94
 - 3 避難所での支援策 96
- II ボランティアアンケートより
 - 1 避難所の環境面 98
 - 2 避難所の運営面 100
 - 3 避難所での支援策 102
 - 4 三条市役所職員、避難者との意思の疎通 104
- III グループ長（市職員）アンケートより 105
- IV 今回の経験を活かした今後の避難所運営のあり方 110

■ 第4章 避難所生活から新たな生活へ

- ・避難者手記「今想うあの日」 111
- 「避難所から県営住宅へ」 115

第1章 避難者の受入れ

○避難者受入れの経緯

平成23年3月11日の東日本大震災発災後、避難者が15日頃から続々と新潟県へ避難されてきた。16日朝に庁議を開催し、「三条市を頼って来る人もあるだろうから避難所を開設する」こととなった。同日の昼頃、新潟県から「本日中の受入れが可能か」という電話があり、三条市では同日中の受入れを決めた。

新潟県内の避難者の受入れは大きく分けて3パターンあり、車での避難者を雪崩式に受入れた自治体、独自ルートで被災地に呼びかけて集団で受入れた自治体、福島県南相馬市からの避難者を新潟県主導で割り振られ、受入れた自治体があり、三条市は、南相馬市からの避難者を県から最初に割り当てられた。

当時、新潟県でも情報が錯綜しており、避難者の人数も分からない状況であった。当初、南相馬市からという話であったが、途中からは、「南相馬市方面から」という言い方となり、到着時刻も夕方と言っていたのが午後10時となった。

三条市は、7.13水害を経験していたので、ある程度は避難者受入れのノウハウを持っていた。発災5日後、風呂に入っていないということで、まずは入浴設備のある総合福祉センターに入ってもらった。三条市は被災地ではないので避難所をしっかりと整え迎え入れるため、寝具一式も準備して待ち受けた。

約260の方がバス6台に分乗して来条された。最後のバスが着くまでに90分もかかった。途中のトイレ休憩でそこまでの時間がかかったのは、足が不自由な人、認知症の人、重い病気の人が出たからで、まさに「社会の縮図」がバスに詰め込まれていた。



避難所（体育文化センター）に到着したばかりの避難者の皆さん



翌日、第2陣が到着し、別の2施設に入ってもらったが、そこにはシャワー設備しかなかったため、先に日帰り温泉施設へ寄ってもらった。避難者の中にはバスに乗ってから行き先を知らされ、三条市がどこにあるかも分からずに到着した人もいた。

避難所には、「三条市は皆さんを心から応援します！」という横断幕を貼るなど、三条市が避難者を心から歓待していることを示した。



避難者の方々へ出迎えの挨拶をする國定市長



～避難者の方の手記～

「福島県南相馬市から新潟県三条市へ」

南相馬市原町区 千葉 広美

3月11日午後2時46分、地鳴りと共に大地震発生、震度6強、マグニチュード9、そして大津波、更に津波による福島第一原子力発電所の水素爆発。

震災発生当時、私は職場が自宅から南へ43km（双葉郡楢葉町、福島第一原子力発電所から約13km南です）海岸線沿いの所へ通勤していました。地震発生後、会社の敷地内が地割れや土砂崩れ、液状化現象も起こっていました。一端高台に避難するも雨が降ってきたので、免震重要棟へバスで移動し建物に入った瞬間「津波だぁ！！」私の車は水没しました。嘘であって欲しいと願いましたが、事実でした。夕方6時過ぎ頃から会社から20km圏内までの人達は家へ帰る事が出来ましたが、浪江町、南相馬市方面から通勤している私達は帰宅することは出来ませんでした。「道路状況が把握できない為、安全を確認してからでないと、帰すことが出来ません。」と会社からの指示が出たのです。その日の夜は会社へ泊まりました。家族と連絡が取れたのは地震発生のその日一度だけ、「みんな無事だから。」「私も会社にいるから大丈夫。」その後、衛星電話から何度かけてもつながらず、メールのやり取りもできないまま時間だけが過ぎていきました。父母、子供たちを信じるしかありませんでした。

ようやく帰宅できることが決まったのは地震発生後から二日目の夜、「明日の朝、ここを出ます。」原子力発電所の事故の発生からここに居るのも危険になり、帰宅の指示が出たのです。やっと帰ることが出来ます。一週間位居たようなとても長い二日間でした。通常なら海岸線を走れば1時間位で南相馬市へ行けますが、原子力発電所の事故と津波の被害で通行できません。山の方から迂回して帰る方法しかありませんでした。一体何時間かかるのだろう。

3月14日朝6時、乗り合いで会社を出発しました。町中は家の屋根が崩れていたり、窓ガラスが割れていたり、傾いている家もありました。道路も所々隆起や陥没していました。信号も斜めになっていて機能が止まっていました。全く人影も無く静まり返っていました。この町の人達はすでに避難していたのです。やっと人が住んでいる町へ入ると放射線量の測定です。頭の前からつま先まで。みんな数値的には大丈夫でした。そこでやっと家族との連絡が取れ、みんなの無事の確認と、やっと帰られる事を告げる事が出来ました。ガソリンスタンドには長蛇の列。みんな給油を求め並んでいました。

山をいくつ越えたでしょう、やっと南相馬市への道につながり下って行くと対向車がズラリ。みんな遠くへ避難を始めていたのです。知り合いの車も数台見かけました。県外の消防車も数十台すれ違いました。見慣れぬ光景に改めて大変な事態が起きているのだと思いました。町中はひっそりとしていました。家に着いたのは午後2時頃でした。

3日ぶりの元気な子供達の顔、無事でいてくれてありがとう。抱きしめたぬくもりは忘れる事が出来ません。

私の家は津波の被害はなく無事でしたが、原子力発電所から約 23 km。屋内退避指示が出されていたため家に留まっていました。散らかった部屋をみて呆然としましたが、片付ける気力も無くただテレビを見ているだけでした。このまま家から出られない日がいつまで続くのか、そうなると思料品もいつかは尽きてしまう。

3月16日、朝食を摂っている時、弟から電話があり「避難したほうがいい、避難所の方が安全だから。30分後に迎えに行くから支度しておいて。自分達も避難したいからその前に避難所へ連れて行く。後は無理だよ。」と、突然の避難に慌てましたが、防災無線は「外に出ないようにしてください。」の繰り返し。テレビは福島第一原子力発電所の事故のニュースばかり。すでに避難している人達が沢山います。安全を考え避難する事を決めました。とりあえず子供達の着替えを二日分位持っていけば・・・(すぐに戻れるだろうと思ったので)、急いで準備し弟が来るのを待ちました。

私の車は職場で津波の被害に遭った為にはありません。父の車はガソリンが殆どなかったので、弟の言うとおりにするしかありませんでした。

そして、私は娘二人と両親5人で石神生涯学習センターという避難所に行きました。ここの避難所もその日の夕方に閉鎖が決まり、近くの石神中学校の体育館へと移動になりました。沢山の人数に驚きました。生涯学習センターには布団がありましたが、体育館には一人一枚の毛布だけ。床に雑魚寝状態でした。食事は白いおにぎりとお菓子パン、水、あとは支援に届いたお菓子だけでした。

3月16日夜の事「明日、新潟県へ避難します。ここの避難所は閉鎖します。出発時間はわかり次第連絡します。」新潟県への避難が決まった。

避難所へ来た時、19日頃にどこか遠くへ避難するとは聞いていたが、明日？新潟？急の事で驚きました。

そして、午後11時過ぎ頃「新潟県三条市での受け入れが整いましたので、明日の朝8時に出発します。そこで、これから言う3つの中から自分の好きな道を選んでください。『①バスに乗り、新潟県へ避難する』『②ガソリン100の券を差し上げます(震災によるガソリン不足の為制限されていた)ので、自分の車で新潟県へ避難する』『③ガソリン100の券を差し上げますので、自分の好きな所へ避難する』以上、明日の朝6時に希望を聞きます。」眠れませんでした。

私たち家族はバスに乗るしかありませんでした。約500人中、約半数の250人が、『①バスで新潟県へ避難する』を選びました。車を置いてバスに乗る人もいました。

子供たちの安全を考え一時遠くに避難するだけ、とにかく今は行政に身を任せた方が安全だと思いました。新学期が始まるまでには南相馬市に戻れるだろう。そうあって欲しいと願いました。

校庭には自衛隊のマイクロバスと地元のバス会社のバスが数十台停まっていた。私達は自衛隊のバスに乗りました。山越えした川俣町まで行きました。約41kmとても遠く感じました。

川俣町には大型バスが6台待っていました。千葉県から支援にと来てくれていました。原子力発電所の爆発で南相馬市に入る事が出来なかったようです。子供たちは大きなバスに大喜びでした。私も普段の生活に触れた感じがしました。

バスのフロントに行き先の張り紙が。“体育文化センター”“ソレイユ三条”2か所です。ここで、どちらのバスに乗るかでその後の避難生活が決まってしまうとは夢にも思いませんでした。行き先を見てもどんな所にあるのか、どんな施設なのか、どんな人達と生活を共にするのか新たな不安が増えました。

子供たちは遠足気分になったのか「ママ、バス大きいねえ。こっちのバスがいいなあ。こっちにしようよ！」とバスで選んだのは“体育文化センター”行きでした。

太平洋側から日本海側へ横断です。川俣町から約200km。私はいつの間にか眠ってしまいました。目が覚めると高速道路、会津若松市から新潟県へ入るところでした。雪が降っていました。南相馬市を出発した時は天気がとてもよかったのに。「寒いところに来ちゃったな。この先どうなるのだろう。」と思いました。

「お知らせがあります。市長の計らいで避難所に入る前に温泉に立ち寄ります。」バスの中は「やったあ、お風呂に入れる。」大体の方が約一週間ぶりのお風呂だったので、とても喜んでいました。今を思えば、受け入れが整った時点から温かい支援が始まっていたのですね。

三条市内に入りまず目にしたのは、道路が茶色だったこと。そして道路の中央線に穴が開いていること。「雪国ならではの消雪パイプだよ」と教えてもらいました。そこから出る水で道路が茶色になる事を知りました。市内には雪はありませんでしたが、温泉場に向かうにつれ雪が増えていきました。子供たちは生まれて初めて見た雪の量にびっくりしていました。

温かいお風呂に入りさっぱりし、避難所へ向かいました。

避難所に着き、これから生活していく部屋に案内されると部屋は温かく、壁には大きな張り紙が目に入り『三条市はみなさんを応援します』と書かれていました。そして一人一組の新しい布団が用意されていました。南相馬市の避難所とは全然違う環境に安心しました。

避難所では國定市長をはじめ三条市職員の方々、ボランティアのみなさん、色々な形で支援してくださった方々のお陰で、不安のない生活を送ることが出来ました。

子供たちも学校へ通うことも出来ましたし、私も働き始めることが出来ました。避難所だけでなく、外での生活に触れることも出来ました。

もし避難しなかったら、弟からの電話がなかったら、違う避難所に連れて行かれていたら…等々考えると切りがありませんが、あの時避難して本当に良かったと思っています。今は第二の故郷として三条市での生活を楽しんでいます。

これまで支えてくださった方々に心より感謝いたします。親子共々、このご恩を決して忘れる事無く生きていきたいと思っています。